

とりなしの祈りの「型」

(「テサロニケ人」一〜三)

先日の出張の際、教団の出版社、A G福音出版の新刊書、『聖書の祈りが私の祈りになる(新約編)』を頂いた。教区長になって忙しさばかりが増えた感があったが、ちゃんと恵みも備えられたというわけでパラパラと読んでみた。先に出版された旧約編と同様、聖書にある様々な祈りの箇所をまとめ、注釈をつけ、現代教会への適用を書いた「祈りに関する聖書神学(原書副題)」といえる本である。翻訳者はベテルにも来られた吉原博克宣教師と、まさに日米アッセンブリー教団の英知を結集した一冊である。

閑話休題。今日からテサロニケ人への手紙第一を学ぶのだが、この手紙を書くパウロの心境は熱気あふれるガラテヤ書などに比べると実に穏やか。「使徒であるパウロ」などと大見得を切ることをせず、名前だけでさっさと手紙を始める。パウロとテサロニケ教会の間にある信頼を垣間見ることができる。以下パウロのあいさつと祈りの中から私たちが聖徒たちのためにとりなす際の「型」を学びたい。

一、神に感謝しつつ祈る

パウロはここでテサロニケ教会のために祈っている。つまりこれは一種の「とりなし」の祈りである。パウロはテサロニケ教会のために祈ることが必要だと思ひ、いつも祈っていたのである。必要があるということは、要は解決しなければならぬ問題があったということである。そしてこの手紙を読み進めていけば教会の中には気ままな者や小心な者もいたし、再臨の教えに関する混乱もあつたようだ。そういった問題解決を考えると人間の心には往々にして「重苦しい」ものが出てくるのだが、パウロの祈りにはそうしたものはない。むしろ彼の祈りは感謝と結ばれている。誰への感謝か。もちろん神への、だ。つまりパウロのとりなしは神への感謝に基礎づけられていたということだ。これは重要だ。なぜなら感謝を忘れたとりなしは時に神への不平やとりなすべき人々への批判に転化してしまうからだ。神に感謝をささげ、そこから執り成していくという順序は祈りの良き「型」なのだ。

二、とりなす人々を思い起こす

パウロのとりなしの祈りはまたとりなしている対象の人々のことをよく思い起こす

祈りであつたということが言える。単に名前を挙げ、顔を一致させたというレベルではない。彼はテサロニケ教会の具体的な行動を思い起こしているのだ。三節の「信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐」は英訳(NIV)では「信仰が生み出した行動、愛に促された労苦、私たちの主イエス・キリストにある望みによつて鼓舞された忍耐」と訳されているが、実に具体的かつ動的である。そうした一つ一つのことを思い起こすことは漫然としていてはできない。パウロは本当に頭脳をフル回転させ、一心にテサロニケ教会の兄弟姉妹たちの一挙手一投足を思い起こしながらとりなしているのだ。

三、神の恵みと平安を祈る

以前も話したことがあるが、就活生たちは不採用通知のことをよく「お祈りメー」と呼ぶという。また不採用になることを「祈られた」と表現するらしい。恐らく「大坂、お前また祈られたんだってなあ」といった使い方をするのだろう。しかしこの手紙におけるパウロの祈りはそうした軽佻浮薄なお祈りとは一線を画す。ある学者によれば「恵み」と「平安」を祈るのは多分にユダヤ的背景があるといるが、ではこの恵みと平安の出どころはと言えばテサロニケ教会が根ざしている

父なる神と主イエス・キリストである。またこの恵みはすべての祝福の源泉であり、平安はその祝福の結実である。よつて父と御子から流れる、この恵みと平安を祈ることはテサロニケ教会が直面したあらゆる問題を解決することになる。だからパウロは最初からこのことを祈つたのだ。この恵みと平安を得たなら、たとえどんな問題であれ、神がそれを解決してくださるといふ確信を得られるのだ。

* * *

こう考えると「とりなしの祈り」とは実に高度な知的活動であり、神との濃密なコミュニケーションであることがわかる。「黙祷!」の合図とともに一分を過ごす類のものと同列に置いてはいけない。「黙祷」は集中が切れやすい。「心ここにあらず」になつてしまふことが実によくあるのだ。ではどうしたら使徒のごとき集中したとりなし手になれるのだろうか。簡単である。はつきりと声に出して祈ればよいのだ。「字義的」に神と語らうのだ。それ即ちイエスの、そして使徒たちの祈りである。弟子たちはイエスの祈りを聞いたからこそイエスの祈りは聖書に収録されたのだ。イエスは声に出して祈る方であつた。私たちが友のために声をあげ、主に感謝し、とりなすものになりたい。アーメン。